

第二部

成績が沈滞する 子どもの6つのサイン

—そういえば最近そんなことがあったかも…—

ハイパーラーニング名取教室 塾長 工藤 豪 著

成績が上がらないワケとは？

子どもの成績を伸ばす仕事をしていると、当然ですが成績が停滞している生徒に目が向きます。同じように教えて、他の生徒は伸びているのに、どうしてその生徒はなかなか成績が上がっていかないのでしょうか。

成績が上がらない原因は2つあります。

- ① 勉強をやっていない。量が少ない。
- ② 勉強をやっているが、何か問題がある。

②はさらに2つに分けられます。

- ・勉強方法に問題がある
- ・性格、思考に問題がある

「勉強方法に問題がある」ケースは、ご家庭にその話をしてもあまり意味がないと思いますのでここではカットします。

本書で取り上げたいのは、「性格、思考に問題がある」というパターンです。

それまで順調に伸びていた生徒が、突然、または徐々に成績不振に陥ることがあります。こういった生徒は、勉強方法に関しては正しい知識があるので、不振の原因はまさに本人の性格や考え方に由来するケースが多いです。

指導現場の中でこれらのサインが現れると、私たちは「これはマズイ兆候だな」「この性格が災いしているな」と感じ、すぐにその場で指導します。しかし、性格や思想というものはそう簡単に改まるものではありません。

本書は、普段、子どもの身近にいる親御さんにもこの危険信号を知っていただき、今後の教育の参考にさせていただければと思って書きました。では、早速見てまいりましょう。

成績不振の前兆その1

1. 争いの外側にいたいタイプ

上で苦しむよりは下で…

「あなたなら、少しがんばればこの学校に行けるよ。」
志望校面談で、私は入試データとその子の能力に基づいてアドバイスをします。

「えっ？そうですか！じゃ、がんばります！」となってくればいいのですが、「でも、私は…」と言って安全圏の学校にする人もいます。そうする理由はいろいろあるようですが、中にはどうも気にかかる返答もあります。

「そこへ行ってもついていけないかもしれない…。」

「上の学校でビリの方で苦しむよりは、学校のレベルを一つ下げて、上の方でいたい。」
などがそうです。真面目な女の子に多い意見です。

どの世界にも競争が待っている

「そこへ行ってもついていけないかもしれない」というのは、ただの幻想です。**ついていけない人はそもそも入試に受かりません。**高校で授業についていけない人というのは、途中で不登校になったりして、長い間授業に参加できなかった人です。きちんと授業を受けていれば、ついていけないなんてことはありません。

もう一つの「ビリで苦しむよりは…」という意見は分からなくもありません。しかし、**本当にそれでいいんでしょうか。楽をしてはいないんでしょうか。**

高校、大学を出て社会人になったとき、**どんな世界にも競争があるのを知る**でしょう。

そこでは、「どうやってこの困難に打ち勝つか」ということを真剣に考えないといけません。そのとき、過去の体験が生きます。**「あのとき、がんばって壁を乗り越えた。今度もやるはずだ。自分にはできる。」という考えが成功を生み出します。**

逆に楽な道を行ってきた人は、ひ弱になっているので、そういう考え方はできません。そして、争いを避けるために社会からドロップアウトしようと考えます。「苦しくないところはどこだろう?」「自分が上の方でいられるところはどこだろう?」と。そんなところは世の中にないのにもかかわらず…。

受験で一皮向ける

受験は成功体験を積むための絶好の機会です。それは人生の大いなる武器になります。

また上を目指していれば、願書提出の最終段階でそこに届く力がなくても、行ける高校の選択肢は広がっているはず。狙って損はありません。

争いの外側にいたいと考える人は、成績が停滞しているケースが多いです。安全圏の方を向いた、ほどほどの勉強をしているので、可もなく不可もない状態が続くのです。

部活などの、何か特別な理由があってその安全圏の学校を志望するならともかく、後ろ向きな理由でレベルを下げるのは、今後の長い人生のためにはならないように思います。最初の目標は高く設定しておくことです。

成績不振の前兆その2

2. ひらがなが多いタイプ

にちべいしゅうこうつうしょうじょうやく

日米修好通商条約をオールひらがなで書いた新入生がいました。条約名を知っているのに、そんなに勉強ができないわけではないと思うのですが、この答案を見た採点者や試験官はどう思うのでしょうか。いい印象を抱くのでしょうか。

ほかには、テストで「奥羽」山脈という漢字に自信がなくて、ひらがなで安全に行って「おおう」と書いてバツになった生徒もいました（正解は「おうう」）。

いずれにしても、ここ最近、キーボード文化の影響でしょうか、**文字を漢字で書ける人が少なくなってきた**ように思います。

返却された答案を見ると漢字の間違ひが多いんですね。国語の漢字問題で間違ひならともかく、**理科社会で漢字によるバツが多い**のですから、これでは得点は上がってきません。

こういう生徒は、一般に普段から文字を漢字で書く習慣がありません。ノートを見てもひらがなばかりが目立ちます。勉強だけでなく日常生活のあらゆる場面でそのようになっているのだと思います。

これは、テストだけで修正できるものではありません。普段から漢字で書けるものは漢字で書くよう、身近にいる親が注意・指導していただきたいと思います。

成績不振の前兆その3

3. 完全主義タイプ

「先生！まだ消さないで下さい！」

黒板に書かれたことをノートにせっせと丸写している生徒がいます。いろいろな色を使って、きれいにノートを作成しています。他の人は、ポイントをメモするぐらいで、どんどん問題演習に入っているのに…。

何事もきちんと完全にできてからでないと次へ進めない性格なんですね。これは非常に厄介です。**手を動かして実際に問題を解くことで始めて力がつくのですが**、完全主義者はそれを後回しにしてしまいます。

数学の計算も同様です。完璧症の人は、解き方をきちんと100%理解してから出ないと例題に取りかかりません。何度も何度もやり方を見て、理解してからようやく問題を解くことを始めます。結果、時間内に問題を解いた数は他人よりも大幅に少なく、それによって本当の意味での理解が遅れてしまいます。

勉強というのは、まず一步踏み出し、やりながら修正して覚えていくものです。しかし、完璧主義は、一步出るまでに時間がかかりすぎ、結局その一步が出ません。もともと生まれ持った性格と云えばそれまでですが、直せるなら直したいものです。

成績不振の前兆その4

4. ミスを軽く考えるタイプ

ケアレスミスって何？

「95点でした。少しケアレスミスをしてしまって。」とか、「ただ x と y を反対にしたらだけ」などと、**失点部分を軽く考える**人がいます。この手のセリフが帰ってきたときは、本当に背筋がザワザワッとします。高得点を取るけれども、いま一つ伸びが見られないという人に多いです。自分のミスはたまたまだ。本当は、ここは分かっていた。落ち着いてやっていたらできていた、と考えるんですね。**伸びない原因はまさにここにあります。**

私は、ケアレスミスというのはこの世にないと思っています。ミスに程度の差などありません。**途中まで出来ていて最後でしくじっただけの人と、初めから全く分からない人に程度の差なんてありません。テストではともに0点になります。**

そのぐらい深刻かつ致命的なことなのに、本人は軽症と考えています。その認識こそまさに学力不足の根源です。全てのミスは、本人の実力不足、学力不足からきているのです。

本物のトップ層は、-5点を非常に重く捉えます。今後どういう方法をとれば失点がゼロになるのか、懸命に考え抜きます。あらゆるミスを自分の今の力と正面から受け止め、改善に向けて努力します。

気づいてくれっ！気づいてくれっ！

私は、授業で数学の丸付けをして歩くとき、マイナスのつけ忘れや、約分のし忘れにも、他と同じように普通にバツをつけます。ほとんどの生徒は何回も見直したあと、結局間違いに気づかず「一体どこが違うのか」と迷走を続けます。

「マイナスがないんだよ！」という言葉が喉元まで出かかっているのですが、**それを言っただけは、その生徒の「ミスを軽く見るクセ」が直らないので言いません。**その生徒が自分で気づくまで粘り強く待ちます。

仕方がないので、生徒は全部消して一からやり直します。そして出た答を私に見せ、マルをもらおうと「なんだ、ただの符号か…それぐらい言ってくればいいのか」という顔をします。しかしこちらは普段のように淡々とします。**軽症を重症と感じて欲しくて**そうします。

生徒の中には「さっき、同じ答えを書きました！」と、自分のミスに気づかず、正当性を主張してくる人もいます。70点前後の人に多いです。

私が「さっきのはマイナスがなかったよ」というと、「つけていましたよ！」と反論。そうなるともう収拾がつかなくなるので、私は「そうか、見間違いだったか。悪かったな。」と引いて引き下がります。

その生徒の心に、「あの先生は軽いミスでも平気でバツをつける人」という印象を植え付けたので良しとします。そういう細かい積み重ねで、彼らの意識を変えていくしか方法はないのです。

もし、お家の方でお子様の勉強を見てあげる機会がおありでしたら、以上のように「ミスを軽く考えるクセ」をなくすように持って行ってあげてください。(ただし、テストで30点以下の人には一つ一つミスを拾っていく方法がいいです)

成績不振の前兆その5

5. 結果だけ気になるタイプ

合格判定は何だろう？ドキドキ・・・

模試の結果を返すと、**偏差値や判定に一喜一憂してそれで終わり**という人がいます。本当はそこからどのぐらい復習するかが最も大切なのに、そのことは全く頭にありません。

こういう人は、試験が終わった直後、解答を渡すときにすぐ分かります。解答の中身をチェックしようとせずに、すぐそれをかばんの中に放り込むんですね。本人にとっては、模擬試験はあくまで体温計。判定が分かればいいので解答に何と書いてあったかはどうでもいいのです。

これは大変危険です。勘違いも甚だしい。考え方がまるで逆です。

模擬試験は最高の教材

模擬試験は第一に復習教材として便利だから受験するのです。静粛な空間で制限時間内に懸命に解いたテスト。それがどれぐらいできて、何が解けなかったのか。入試前に自分の「穴」を発見してそれをしっかり埋めるためにやっています。

本物のトップクラスの人たちはこのことを実に良く分かっています。だから、彼らは試験前よりむしろ試験後に一生懸命勉強します。試験後すぐテストでできなかったところの開拓にあたるのです。

試験前に勉強して、試験が終わったら遊びまくる一般人とは、行動、考え方が正反対。彼らは、試験前は普通に普段の勉強で過ごし、試験後にスパートをかけるのが普通です。

志望校判定は二の次

一方、志望校判定は、入試直前に参考にすることはありますが、普段はどうでもいいです。Aだから良かったの、Cだから無理だの、必要以上に気にすることはありません。

もし子どもが成績を報告に来たら、一緒に感情的になるのではなくこう答えて下さい。
「今は何判定でもいい。それよりきちんと復習した？」

成績不振の前兆その6

6. ネガティブ発言タイプ

「できないから苦手」ではなく「苦手だからできない」

「無理」「できない」を口にする人がこのタイプです。自分で自分に壁を作ってしまったています。**「セルフイメージ」**という言葉をご存知でしょうか？今世紀最大の心理学的発見と言われています。

今までは、結果からイメージが生まれるものと思われていました。例えば数学のテストが悪いなら数学に苦手イメージを持つし、人と上手に会話ができないならコミュニケーションが苦手と考えます。

しかし、全ては反対なのだそうです。**数学に苦手意識を持っているからテストの点が悪く、コミュニケーションに自信がないと考えているから人と話せない**のだそうです。これが「セルフイメージ」の力です。

これは動作と感情の話に似ています。今度は脳科学の話です。

動作は感情に従って起こるように思われています。例えば怒りの気持ちが沸くと目がつり上がり、幸せだと目じりが下がるというように。

笑顔をつくれれば幸せになる

しかし、実際は動作と感情は対等の関係にあるのだそうです。つまり動作を調整することによって感情を調整することもできる、例えば、無理にでも笑顔をつくると、やがて人は幸福感を感じるというのです。

NHK で似たような実験をやっていたことがあります。アナウンサーが割り箸を横にしてくわえて無理に笑顔をつくったところ、数分後に脳内にリラックス時に発生する α 波が広がったのです。

このことから勉強に応用して考えると、実際に解けない問題があるから無理と感ずるのではなく、無理と思っているから解けない、伸びないということが言えないでしょうか。

実際に指導現場を回っていると、本当にこの通りだと痛感します。問題を上から見下ろすことのできる人は、心に余裕があるので、問題文の細かな指示を見逃さないし、着眼力も優れています。一方、自信がなくて、問題を下から見上げる人は、指示を見落としたり発想が狭くなったりしています。

十分な学力があるのに点に結びつかない人は、このように問題に対する心構えに難点があるケースが多いです。そういうとき、私は「大丈夫。自信を持って。落ち着いてもう一度文を読んでみて。」と励ましますが、何しろ性格的な部分なので、その場の授業だけではそう簡単に改善はされません。長くじっくり、普段の生活を含む様々な場面で対応していく必要があると思います。

以上、成績が沈滞する性格的・思考的部分を見てまいりました。勉強のやり方や問題の解き方を教えても、これらの根本が原因で成績が停滞する場合があります。これはご家庭でも注意、改善できる内容です。習慣になってしまう前に指導してください。

第2部まとめ 『成績が沈滞する子どもの6つのサイン』ポイント集

1. 争いの外側にいたいタイプ…「上の学校のビリでいるより、下の学校の上でいたい」
2. ひらがなが多いタイプ…勉強だけでなく、日常からそうなっている。
3. 完全主義タイプ…考えてばかりで、初めの一步が出ない。
4. ミスを軽く考えるタイプ…「ケアレスミス」と言い、「本当は分かっていた」と考える。
5. 結果だけ気になるタイプ…志望校判定に重きをおき、復習をしようとならない。
6. ネガティブ発言タイプ…「自分には無理」「できない」と言う。